
遊戯王 5 D' s ~ 転生者は死を告げる者 ~

天狗 鞍馬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王SD・S〜転生者は死を告げる者〜

【Nコード】

N2887Y

【作者名】

天狗 鞍馬

【あらすじ】

はい、衝動的に書きました。反省はしていますが後悔はしていません。オリカが大量に発生したり、文章力が無いので駄文ですがもしよろしければどうぞ

プロローグ

僕の名前は黒羽聖^{くろはひつひ}。どこにでもいるカードゲームが大好きな学生です。このたびとある有名大学に合格し入学を控えていたのですが・
・轢かれました、トラックに。容赦なく、某不吉数字のスナイパーに狙われたぐらい容赦なく轢かれました。

走馬灯を見る暇もなく視界が暗くなっていって――。

気が付いたら、蒼い部屋にいました。

置いてある家具は全て藍色や紺色、水色とにかく青色の系統で揃えられていました。

でも部屋自体が動いているように感じるのでもしかすると乗り物なのかな？

なんてのんきなことを考えていると――

「あ、目を覚ましたか」

見知らぬ青年と老人がこちらを見ていました。
青年はほっとしたような顔を、老人は申し訳なさそうな顔をしています。

「とりあえず自己紹介かな。俺の名前は水無月蒼也^{みなつき そつや}。神様代理人としてのをやってる。んでこつちが君を死なせた神様ね」

「え？」

神様？ってことはGOD？・・・死なせた？

「ええっと・・・」

「簡単に言つとね、このおっさん、君の書類に茶をぶちまけたんだよ。で、そのせいで君の寿命の欄が汚れちゃってね。そこが塗りつぶされると勝手に寿命が0になるんだよ。

すぐ拭けばどうにかなったんだけど、それより早く『世界の強制力』が作用して君を殺しちゃってねー」

なんてこつたい。そんな簡単に命奪われるんですか。

「ただ、このまま放っておくとこのダメ神様が色々大変なことになるから君を一旦ここに御招待して、後のことを決めようってことになったのさ。ここまでのいい？」

「あ、はい」

とりあえず頷いとく。

「で、君の処遇なんだけど・・・転生してくんない？」

「ふえ？」

転生？何ですかそれ？

「簡単に言えば、もう一度人生やり直さないかって話」

「厳密に言うとなんか違うがの」

「簡単について言ったじゃん」

「もう少し詳しく言うとなんか平行世界と呼ばれる世界に記憶や経験などをそのまま赤ん坊状態にして送り込む、といった感じかの。そういう人間を転生者と呼ぶのじゃ」

赤ん坊・・・ちよつとやだな。

「場合によっては特典とか付いたりするんだけどね」

「特典？」

「例を挙げると、『ゲート・オブ・バビロン』だとか、『無○の剣製』だとか。後最近だと『オール・イクシオン』だとか。ぶつちやけるとチートだね」

「でも、日常生活でそんなもの使う機会なんてないんじゃない？」

強盗とかヤクザかに襲われた時とか便利そうだけど。

「ああ、実はね、転生者は大体どの平行世界に行くか任意で決められるんだ。ゼロの使い魔の世界とか、恋姫無双の世界とか、リリカ

ルなのはの世界だとかにね。」

「じゃあ僕もそういう世界に行くんですか？」

今蒼也さんが言った作品は、戦いの頻度が凄い多いから特典を貰ってもあまり行きたくないんだけど・・・。

「いや、残念ながら今言った作品はリクエストが多くてね。空いてないんだよ。同じ所だとトラブル多いしね。で、君が行ける作品は1つしかないんだよね」

「ええ!？」

「このダメ神ホントにダメでね。君で4件目なんだよ、転生者をだすの」

「何回お茶こぼしてるんですか!？」

「ちなみに前はクリームソーダだったよ。その時ここに来た人は本気でブチギレして家具が全部壊してたよ」

「・・・ですか。で、どこの世界転生するんですか？」

「・・・切り替え早いね。ここに来る人はたいていキレて神様殴つてくのに」

「さすがに悪気は無かったでしょうし・・・殴ったりするのはあまり好きじゃないので」

飲み物こぼし過ぎだとは思うけど。

「そうかい。んじゃ、ちよつと調整しようか」

蒼也さんが手を翳すと空中にディスプレイのようなものが現れた。そのままその下に一緒に現れたキーボードを叩いていく。

「容姿は今のままでいいかい？」

「え？あ、はい」

カ
タ
カ
タ
カ
タ
・
・
・
・

「はい、それじゃ。調整終りよーう。ついで、君が行く世界は遊戯王5D'sの世界だよ」

「ほんとですか！？やった！」

思わず飛び跳ねる。あの不動遊星とかに会えるんだ！
あ……でも、結構命懸けじゃない？ダークシグナーとかイリアス
テルとか……勝てる気がしないorz

「あ、ちなみにデツキの方はこっちで用意しとくから。それじゃ、第2の人生楽しんでね」

「あ、ちよつとま……」

言いだすよりも早く、足元に大きな穴が開いて――

「うわあああああああああああああああああああ
!？」

真っ逆さまに落ちて行った。

がんばってねー と、あまり優しさの無い応援を聞きながら

僕の視界は、再び暗くなって行った。

変わる日常—どうしてこうなった？

「決闘だ！」

・・・どうも遊戯王5D'sの世界に転生した黒羽聖です。神様のミスで死んでから約2か月が過ぎました。

僕は一般的家庭に転生して、本当に赤ちゃんからやり直すことになり・・・うう恥ずかしい・・・！

で、現在。

銀髪オツドアイな人に凄い睨まれながら決闘を申し込まれました。
・・・なんで？

とりあえず、なんでこうなったかを思い返してみよう・・・。

（約3時間前）

「聖ー、宿題写させてくれー」

「ええ？また？」

「いいじゃねーか減るもんじゃないし」

「自分でやらなきゃ意味が無いって……」

「代わりに俺特製プロテインやるからさ。頼む！」

「いらないよ！というか、提出日は来週なんだから自分でできるでしょ絶対」

「いつもの頼む！」

「真人の為にならないからダメ！」

「ええい！ならば俺特製のダンベルも付けよう！」

「いらないから！使わないから！それ真人が必要な物でしょ！てか特製って何！」

今話しているのはクラスメイトの島津真人。結構なトレーニングマニア（正確に言うと筋肉マニア）だ。運動神経抜群、頭もよくて顔もいい。が、面倒臭がり屋なのがたまにキズ。ちなみに寮では同室だ。

そして僕が通っている学校は何を隠そう、あのデュエルアカデミアだ。アニメで見たことあるけど結構大きかった。

十六夜アキがいないといいなあ。彼女は可哀想とは思っけど僕には度胸がないからなあ。蒼也さん達からデッキ貰ってるけど、サイコデュエリストとデュエルするのはやっぱり怖い。

ちなみに僕が貰ったカードは今まで見たことのないカードばかりだ

った。というか、普通のデュエルで使って大丈夫なのかと不安になってきた今日この頃です。

「ちょっと島津！黒羽が困ってるでしょ！？遠慮ってものをしなさいよ、あんたは！」

クラスメイトの女の子が真人を僕から引っぺがしながらそう言う。周りの女子もそうだと口を揃えていた。

「黒羽ももつとビシツと言ってやんなさい！ああ言う奴は本当に懲りないんだから！」

「う、うん。ありがとう（ニコツ）」

「ツ！！／／／（ボンツ）」

あれ？目逸らされたなんで？

「あ、そうだ黒羽君、私と喫茶店行かない？」

「あ、ずるい！黒羽君！私たちとカラオケ行こうよ！」

「黒羽君！私の手料理食べてくれない！？」

「黒羽君、私の部屋に来て！」

「聖君！私と・・・ハアハア」

「・・・ハアハアハアハアハアハアハアハア・・・」

ヒイ！？こ、怖い！何か獲物を狙う目だ！特に最後の二人辺りが一番まずい！だ、誰か！？

「おいこら女子ズ、聖を泣かせんな。散った散った！そして真人、勝手に聖の宿題写そうとするな」

と、混沌としていた教室を静めたのは井上スグル——クラスメイト兼ルームメイトだ。ちなみに真人もスグルも中学からの付き合いで、互いに考えていることが分かるようになってきた。

「ありがとう、スグル」

「お前はとりあえず、礼を言うとき笑顔になるのをやめろ。特に女子の前では」

「あれ？ そうなの？ 分かったよ、スグル」

「多分女子の8割はあの笑顔の虜だな」

「いやそれは無いでしょ」

「・・・自覚なしか」

「・・・まあ、男の娘だしな」

「・・・真人お前そこまで堕ちたか」

「え！？ 何その冷たい目！？ 俺ホモじゃないぞ！？」

「・・・ちよつと真人から距離とつところかな。」

「ちょ！ 誤解だ——！！」

なんて馬鹿話に花を咲かせていると。

「あ、いた！オ——イ！聖——！」

「？何——？」

クラスメイトの男子に声をかけられた。しかも急いで来たらしく息が切れている……。なんだろう？

「隣のクラスに、銀城空牙って、やつ、いるだろ？」

「あー、あのへんなイケメンさん？」

「そう、アイツ」

聞いた話だと成績優秀、文武両道でイケメンなプレイボーイだったから女子からの人気は高いらしい。デュエルの成績も相当高いとか言う噂だ。ただ、うちのクラスでは名前はおろか、噂すら話題に上がったことがない。後、傍から見た感じだと話を勝手に自己完結して、人の話をあんまり聞いてないような気が……。

「んで、その銀城君がどうしたの？」

「決闘、申し込むって」

「穏やかじゃないね……。誰に？」

「聖にだよ」

「……。はい？」

「なんで聖なんだ？アイツとは接点が何も無いじゃないか」

真人がもつともなことを言う。・・・その手に僕の宿題のプリントがなきゃ真人の評価が上がったんだけどな・・・。

「なんでも、うちのクラスの女子口説こうとしたら『キモイ』『近寄るな』『くたばれ』と言われて蹴りを撃ち込まれた後に『やつぱり黒羽君が最高ね』って言われたらしく・・・。」

「逆恨みかよ」

「どどど、どうしようスグえもん！こういうときどうすればいいの！？」

「落ち着け！単純な話、銀城に会わなきゃいいんだろが。第一あつちはお前の顔を知らないんだから最悪絡まれても『人違いです』と言えればいいだろう？とりあえず、アイツと鉢合わせ無いように寮に戻るぞ。真人！」

「合点！」

ひょいっと担がれて教室をでる――

「たのも――！！！」

――よりも早く御本人がログインされました。

「ちい！もう来たか！」

「見つけたぞ！黒羽聖！貴様に決闘を申し込む！」

その手に持っているのは二つのデュエルディスク。そして後ろにはうちのクラスの担任、小島先生が立っていた。小島先生は美人で優しいが教育的指導をする時、鞭を持ち出してくる。結構痛いそうだが、批判の声は上がっていない。ちなみに現在鞭を所持中。

・・・逃げ場なしですか。orz

「さあ、俺とデュエルしてもらおうか！」

「・・・やだつて言っても逃がしてくれないんですね」

小島先生が。

「・・・黒羽」

と、小島先生が子声で話しかけてきた。

「はい」

「アイツは少し天狗鼻になっている。気は乗らないだろうがそいつを折ってくれないか？
それともう一つ・・・」

「？」

「お前はクラスの人間と距離を置かないで欲しい」

「あ・・・」

「お前は誰であろうと必ず一歩離れようとしている。過去に何があったのかは知らん。だが——目の前でお前を信頼している仲間たちをもう少し信じたらどうだ？」

「——はい」

「いい返事だ。ではこれよりデュエルを開始する！」

「・・・行くよ」

「ふん、すぐに捻りつぶしてやる！」

「「デュエル！」」

LP4000・4000

「俺のターン！ドロー！俺は手札から魔法カード、愚かな埋葬を発動！デッキからモンスター1体を墓地へ送る。俺はボルトヘッジホックを墓地に送るぜ」

ボルトヘッジホック？ってことはシンクロ重視デッキかな？

「さらに手札から魔法カード、ワンフォーワンを発動！手札のモンスターカード1枚を墓地に送り、デッキからレベル1のモンスター1体を特殊召喚する！レベルスティーラーを墓地に送り、チューニングサポーターを特殊召喚！さらにデブリドラゴンを召喚！」

ATK1000

銀城のフィールドに小ぶりの（それでも僕より大きい）ドラゴン

が現れる。これはまずいかな。いきなりレベル8シンクロが出来るじゃないか。

「そして墓地からボルトヘッジホックの効果発動！俺のフィールドにチューナーモンスターがいる時、墓地から特殊召喚することができる！」

さらに名前の通り針がボルトのハリネズミが現れる。問題はどんなモンスターをシンクロ召喚するのかだね。

「チューニングサポーターはシンクロ素材にする時レベルにとして扱える！いくぜ！レベル2ボルトヘッジホックとレベル2チューニングサポーターに、レベル4デブリドラゴンをチューニング！集い願いが新たに輝く星となる！光射す道となれ！」

「な！？」

スターダストドラゴンの召喚台詞！？嘘でしょ！？あのカードはこの世界では1枚しかない筈じゃ！？

「シンクロ召喚、飛翔せよ！スターダスト・ドラゴン！」

フィールドに現れるのは白い竜。発動した破壊効果を無効にすることができ、不動遊星のエースモンスター——！

ATK2500

「俺はカードを2枚セット！ターンエンドだ（ミラーフォースにリビングデットの呼び声とは、もう勝ちは確定だな）」

・・・攻撃力2500。加えて破壊効果無効能力・・・あれ（・・・）
を使わなきゃ勝てないな。

強くはあるけど——使うとどうなるか分からない。でもそれよりも、みんなの反応が怖い。気味悪がられたら？拒絶されたら？僕はちらりと真人とスグルの方を見る。

目が合うそして——アイコンタクトで告げられる。

（俺はいつでも力になるぞ）（何があっても友達でいるさ）

（———ありがと）

不安は、正直まだあるけれど——信じよう。きっと無事にやり遂げられる。僕なら、いや、僕らなら！

「僕のターン、ドロー！」

「手札から魔法カードグリゴリの占星術を発動！自分のデッキからレベル4以下の神属性モンスター1体を手札に加える。僕は告死天使ベリアルを手札に！そして告死天使アザゼルを召喚！」

僕のフィールドに、黒い羽根を持つ青年が現れる。

DEF1200 4

「カードを1枚セットしてターンエンド！」

「華が無いな。俺のターン、ドロー！ジャンクシンクロンを召喚！効果により、墓地からチューニングサポーターを特殊召喚！レベル1チューニングサポーターにレベル3ジャンクシンクロンをチューニング。集いし星が新たな力を呼び起こす。光差す道となれ！シンクロ召喚！出でよ、アームズエイド！」

爪が鋭い機械でできた、スパロボとかにできそうな腕が現れた。

ATK1800 4

・・・チューニングサポーターの効果を使わないところを見る限り、あまりデュエルをやってないんだろう。

「いくぜ！アームズエイドでモンスターを攻撃！」

ロケットパンチつばい攻撃によってアザゼルはあっさり破壊される。だが、これで・・・

「告死天使アザゼルが戦闘によって破壊された時、自分のデッキから「告死」と名のつくカードを1枚墓地に送ることができる。僕は告死天使ブリュンヒルデを墓地に！」

「スターダストドラゴンでダイレクトアタック！響け！シューティングソニック！」

スターダストドラゴンが音波を撃ちだし、容赦なく僕のライフを削った。

「・・・っ」

聖LP4000↓1500

だがこれで――

「アームズエイドの効果発動！モンスターの装備カードになることができる、スターダストに装備！」

スターダストドラゴン

ATK2500↓3500

「フツ、俺はこのままターンエンドだ」

――勝利のピースは整った――！

「僕のターン、ドロー！墓地から告死天使ブリュンヒルデの効果発動！自分フィールドにモンスターがいないとき墓地から特殊召喚することができる！」

黒い羽根を持つ甲冑を着た女性が、僕のフィールドに現れる。

ATK 0 9

「さらに告死天使ベリアルを召喚！」

同じく黒羽を持つ、小生意気そうな少年が現れた。

ATK 300 1

「く、レベル10のシンクロか！？」

「・・・少し違うかな。いくよ・・・。レベル1告死天使ベリアルに、レベル9告死天使ブリュンヒルデをダークチューニング！」

「ダークチューニング！？なんだそれは！？」

「普通のシンクロは足し算だけど、ダークシンクロは引き算なんだ。この場合レベルマイナス8だね」

2体のモンスターから星が飛び出し、ぶつかり合い、黒く染まった8つの星がその場に残った。

「ば、ばかなそんなモンスター存在するわけが・・・」

「ちゃんというよ。認識できてないだけで」

真っ黒なカードをエクストラデッキから取り出す。

（さあ、いこうか）

——はい。と、カードが答えてくれた気がした。

「汝がおいし大罪は怠惰・・・哀れなものに無慈悲な迷宮を！

ダークシンクロ！君臨せよ、告死墮天使ベルフェゴール！」

現れるのは、12枚の黒い翼をもつ大悪魔の名前を継いだ妖艶な美女。

ATK2900 8

「攻撃力2900だと！？だ、だがそれだけでは俺は倒せないぜ！」

「永続トラップ、リミットリバースを発動！墓地から攻撃力1000以下のモンスターを特殊召喚する。再び来たれ、告死天使ブリュンヒルデ！」

「なにい！？」

「そしてこの瞬間、墓地から告死天使ベリアルの効果発動！自分がモンスターの特殊召喚に成功した時、手札1枚を墓地に送ることでこのカードを手札、又は墓地から特殊召喚することができる！手札1枚を墓地に送り、墓地からベリアルを特殊召喚！」

「ま、まさか！？」

「多分そのまさかだと思うよ。レベル1告死天使ベリアルにレベル9告死天使ブリュンヒルデをダークチューニング！

汝がおいし大罪は暴食・・・絶望をもたらし勝利を謳え！

ダークシンクロ！君臨せよ、告死墮天使ベルゼブブ！」

次いで現れたのは、下半身を黒い球体に沈め、黒い翼を持つ少女。

ATK2800 8

「告死墮天使ベルゼブブの効果発動！フィールド上のマジックトラップゾーンのカード全てを墓地に送る！」

「なんだと！？」

ベルゼブブの球体が真ん中あたりで裂け、巨大な口が広がり、僕のフィールドにあつたりミットリバースと、変態（銀城）さんのフィールドにあつたアームズエイドとセットカード2枚をたいらげた。

「そしてこの効果で墓地に送られたカード1枚につき300ポイントライフを回復する！墓地に送られたカードは合計4枚、よって1200ポイント回復する！」

聖LP1500↓2700

「そしてアームズエイドがいなくなったため、スターダストの攻撃力は元に戻る！」

スターダストドラゴン

ATK3500↓2500

「さらに、ベルフェゴールの効果発動！表示形式を変更し、攻撃力・守備力を半減する！」

「な、なな、ななな！？」

「・・・ふう」

一瞬の静寂は、すぐさま歓声によって破られる。
皆に話さなきゃいけないことは沢山あるけど――

「――ガツチャ。いい勝負でした」

とりあえず、呆けている変態（銀城）さんにそれだけ告げる。

今はこの勝利をかみしめよう。

そう思いながら、僕はクラスメイトの輪の中に戻っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2887y/>

遊戯王5D's ~ 転生者は死を告げる者 ~

2011年11月11日07時43分発行